

観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

特集◎ 夜景観光のポテンシャル — 光のまちづくりへ

◆巻頭言

快適で個性的な夜景づくり 面出 薫……①

◆特集

- 広がる夜景観光、そして未来へ
— 「日本夜景遺産」誕生から「夜景サミット」まで 丸々 もとお……②
- 観光川崎の明日に期待して 斎藤 文夫……⑥
- 大阪を「光と水」でブランディング
— 水都大阪まちづくりの挑戦 室井 明……⑩
- 街路の光環境によって街はどう変わるか？ 角館 政英……⑭

◆視点

- スクリーンツーリズムのビフォー・アフター
— 誘客効果の継続に向けて 朝倉 はるみ……⑱

◆連載

I あの町この町 第40回

金魚島周遊 — 山口県周防大島町 池内 紀……⑳

II 風土燦々⑬

温泉と茅葺きの神通力 (中) — 宮城県石巻市北上町 飯田 辰彦……㉑

III ホスピタリティーの手触り 61

平和を希求したホテルマン 山口 由美……㉓

◆新着図書紹介……㉔



柳川・松濤園

水の都柳川は、かつて蒲池、田中、立花各藩主により形成された城下町。筑後三十二万石の藩主として立花氏は十三代にわたり明治の廃藩まで柳川を治めた。その柳川は掘割が網目状に走る水郷で、「ドンコ舟」がなまこ壁や赤れんがの建物などの間を観光客を乗せて行き交う風情は、水の都にふさわしい光景を醸し出す。また、明治後期『邪宗門』や『忠ひ出』を世に問い、一躍にして近代詩壇の巨擘と呼ばれ、さらに『待ちぼうけ』『ペチカ』からたちの花』などの詩や童謡を残した北原白秋の生家が一部復元され、一般公開されていて旅人が後を絶たない。写真の「御花松濤園」は二六九七年（元禄十年）に建てられた立花氏の別邸で、部屋からは日本三景の一つ、仙台松島の美しい風景を模した庭園が大きなスケールで眺められる。一幅の風景画を見つめるようだ。樹齢二百年から三百年の松の古木が約二百八十本配されていて、カメラのファインダーからはみ出すような迫力が心に沁み入る。

(写真・文 樋口健一)

今、世界中に散在する都市から「夜を美しくしたい」という声が聞こえてくる。わが街が夜に魅力的な表情を呈することとさまざまな利益があるだろうからだ。

太陽が沈んだ後の街の景観は、百パーセント人工照明によって作られている。道路や公園などの公共照明もあるが、オフィスや商業ビル、そして住宅から漏れる光なども、わが街の夜間景観を作る上で大切な要素だ。私はとりわけ建築照明や都市環境照明を仕事とする照明デザイナーとして、夜間を昼間のように煌々と明るくしてきた二〇世紀を反省し、これからのエコロジカルな時代に、さらに洗練された夜景づくりを期待している。二二世紀らしい快適で圧倒的に個性的な都市照明を目指してもらいたいものである。

都市照明とは灯火の時代から始まるが、最初は安全を確保するための技術であった。防犯と交通の安全が期待された。安全への配慮ができてくると次に美しい夜の景観づくりが始まった。土木構造物や建築構造物がライトアップされ、夜間の街のランドマークにもなっていく。そして今後の課題となることは、橋梁や建築をライトアップすることだけではなく、住まう人にとって快適な光に満たされるといふことだ。快適な光とは嫌な光や光害とされる無駄な光を排除することにある。無駄な光とは不必要に天空に向けられた光だ。そ

快適で個性的な夜景づくり

(株)ライティングプランナーズアソシエーツ代表
武蔵野美術大学教授 照明デザイナー

薫 面出

して嫌な光や不快な光の筆頭は、グレアと呼ばれるまぶしい光である。屋外では道路灯や公園灯など、むき出しの放電ランプがギラギラしたまぶしさを発している。これは百害あって一利なしの悪光だ。これらの悪光を丁寧に排除していくだけで、街の中の光は格段に快適になってくる。光と人間との好ましい関係を私たちはきちんと学習すべきである。

私たちの会社は、これまで東京都の臨海副都心部の照明マスタープランや、大阪の都市照明、そしてシンガポール政府からの依頼の「Lighting Masterplan for Singapore City Center」というプロジェクトを担当してきた。これらのプロジェクトを通じて、大切なことは、光の品質を向上させ人々に快適な光を提供することと、その都市にまつわる個性を照明に色濃く反映させることだと実感する。

今年から私は、「和やかな景色」というコンセプトを掲げて、東京駅復元駅舎のライトアップを担当しているが、これも環境に優しくサステイナブルな光を都民に提供するためのものである。三階まで復元された赤レンガの建築ファサードが、優しい光で無駄なく丁寧に照らし出される姿に期待していた。優しく和やかな夜の景観が最先端のLED技術によって二〇二二年春に出現することになる。

(めんで かおる)

夜景観光のポテンシヤル

光のまちづくりへ

地域のにぎわい創出に向けて全国各地でさまざまな取り組みが行われていますが、「夜景観光」にも大きな注目が集まっています。夜景に対する価値観が高まっている社会的背景を探るとともに、「光のまちづくり」を目指して、各地で広げられている活動を紹介します。

広がる夜景観光、そして未来へ ——「日本夜景遺産」誕生から「夜景サミット」まで

夜景評論家・夜景プロデューサー

日本夜景遺産事務局 局長

丸々 もとお

現在のようにミネラルウォーターが定着する以前、「水を買う」という行為はとても広まらないかと思っていた。誰もが水道の蛇口をひねれば、水は無料で飲めたからである。しかし今では「水を買う」行為は当たり前どころか、どこもミネラルウォーターはうまいとか、硬いとか、優しい味がするとか、個人の好みで選ばれるようになった。と、いきなりこんな話をしたのは、「水」と「夜景」がとても似た存在だからだ。「夜景」は夜になれば誰もが無料で楽しめる夜

間景観だ。しかし現在では「夜景を買う」という行為も日常化してきた。夜景のきれいなレストラン、夜景が見事な高層マンション……など、その事例を挙げれば切りがない。都内では昼間の富士山の眺望よりも、東京タワーの夜景が楽しめる部屋のほうが高額となるケースも多い。特にバブル崩壊後の夜景価値の上昇には目を見張るものがある。テレビ・新聞・雑誌等のメディアでは夜景特集が組まれることが増え、その結果、人々はさまざまな夜景に出会い、「私は

レインボーブリッジの夜景が好き」「僕は展望台から望む都心の大パノラマだな」というように、自らの好きな夜景を手に入れるためなら、少し高くても自らが納得できる夜景を求めるようになったのだ。
夜景評論家として十九年目になるが、数々の講演会やセミナーの参加者の声や、延べ三十万人を超える夜景専門の携帯公式サイト「夜景スタイル」のアンケートを分析しても、人々の夜景への価値観は今でも上昇する一方で目が離せない。

さて、夜景と観光の出会いはいつごろからだろうか。私の調査では、「日本三大夜景」とか「百万ドルの夜景」というキャッチフレーズが登場した一九六〇〜七〇年代の高度経済成長期と考えられる。国内旅行が盛んな時期で、火付け役は旅行会社。函館・神戸・長崎といった夜景が新婚旅行の目的地とされるなど、旅行商品としても数多く「夜景」が登場するようになった。

しかし、現在注目されている「夜景観光」は決してその延長線上にあるわけではなく、前述した夜景への価値観が成熟期へ向かう二〇〇四年のころからだ。地方都市における歴史的建造物や橋・梁等のライトアップが盛んになる一方で、私が事務局長を務める日本夜景遺産事務局による「日本夜景遺産」プロジェクトがスタートした時期からだ。これは、日本に存在する素晴らしい夜景資源を一定基準でブランド化し、夜景を有する観光地や施設とともに、人々に多く訪れてもらうための観光資源へと育て上げたいという目的・意志によるもの。具体的に言えば、観光資源として日本各地の埋もれたままになっている夜景資源の発掘、発表、価値付与、そして日本各地で「夜景観光

のウエーブの創造を目指すものである。選定基準としては、「すぐれた普遍的価値をもつ夜景」であり、「誰もが楽しめる夜景地（夜景鑑賞地）」でなければならず、八つの厳密な基準を設け、事務局によって現地調査を行い、認定が決定されている。

日本の夜景観光活性化を目指す「日本夜景遺産」は、すぐ地方都市で受け入れられる経済効果のダウントレンドが背景にあった。その理由は、地方の観光客の減少による交通の利便性はもちろん、個人客の旅行予算減等の理由により、通過型の観光地が多くなってしまう、滞在型（着地型）へと直接つながる観光コンテンツが求められていたのだ。「夜景」はその土地でしか楽しめない観光資源であり、かつ、夜間の観光コンテンツであるため、どうしてもその土地に宿泊せざるを得ない。そこで、「日本夜景遺産」ブランドとしての認定を好機とらえ、その町に泊まる必然性をアピールし始めるようになった。

その最初の例が「神戸」だ。神戸市は「二千万ドルの夜景」「日本三大夜景」という二大ブランドを有しながらも、その夜景

が鑑賞できる六甲山・摩耶山への観光客が激減していた。そこで、日本夜景遺産プロジェクトを推進する私を夜景観光アドバイザーとして招聘し、「六甲摩耶夜景活性化プロジェクト」を立ち上げた。参加者は山上の観光施設やホテル、ケーブル、ロープウエーの事業者の方々で、数カ月にわたり多くの議論が交わされた。結果、「神戸夜景マップ」の発行や、ケーブルやロープウエーの夜間運行と夜間演出、展望台での夜景案内板の設置、「摩耶★きらきら小径」等の展望台での夜景鑑賞環境の整備、通年型の夜景イベントの創出、現地で夜景ガイドとして活躍していただく人材「夜景ナビゲーター」の養成を全国に先駆けて始めた。その多々の取り組みは成果を上げ、二〇〇五年から山上への来訪者は下げ止まり、現在まで右肩上がりが続いている。

やはり、私が夜景観光アドバイザーを務める長崎市でも二〇〇八年から同様の動きが始まった。「日本三大夜景」の一つである稲佐山への来訪者が減少し、それとともに同山上の展望台へアクセスするロープウエーの利用者も減少傾向にあった。また、

福岡市との競争関係もあり、長崎市内の宿泊者数も伸び悩んでいた。そこで市は、これまで本腰を入れていなかった長崎の夜景を観光資源としてとらえ、さまざまなプロモーションを行うようになった。稲佐山山頂の駐車場の整備に始まり、長崎の夜景ガイド冊子の発行や、夜景専門のウェブサイトを「長崎ノ夜景」の立ち上げ、鍋冠山やグラバースカイロード、風頭公園といった夜景の視点場では夜景案内板を整備した。また、現在ではロープウェイや稲佐山展望台の改修を始めている。NHKの大河ドラマ「龍馬伝」の人気も手伝い、二〇〇九年以降、宿泊者数も増加傾向に転じた。

また、「日本夜景遺産」に認定されたことで、首都圏ではあまり知られていない夜景にも注目が集まるようになった。記念日等を祝うライトアップを行う北海道室蘭市の「測量山」、夜景の中に平仮名で「くれぐれ」という文字が浮かび上がるという広島県呉市の「灰ヶ峰」、「グローバルタワー」や「湯けむり展望台」などの市内の夜景名所が連動した観光ツアーを目指す大分県別府市などがそれだ。また、栃木県湯西川温泉の



室蘭市の「測量山」から見た夜景

「光輝く水のぼんぼりとかまくら祭り」は、二〇〇九年に「日本夜景遺産」に認定されたことを受け、東武鉄道スペースシアのテレビCMにも取り上げられ、二〇一〇年には開催以来最高の来訪者数を記録した。

一方、昨今最も注目を浴びている夜景資源といえる「工場夜景」がある。「工場萌え」という言葉を知る人も多くなったが、実は「工場萌えブーム」は二〇〇七年ごろにはいっ

たん鎮静化していた。しかし、二〇〇八年六月に私がプロデュースした「工場夜景ジャングルクルーズ」に端を発し、写真集という二次元ではない、三次元で楽しむ体験型の工場夜景ツアーが大きな話題をさらうようになった。各マスコミが取り上げているが、これまでの媒体価値を試算すると三億円を超える宣伝効果を上げている。神奈川県川崎市でも観光資源としての工場夜景に着目し、私に監修を依頼。案内ガイドである「工場夜景ナビゲーター」を養成し、今年四月から、はとバスやJTB川崎支店で「工場夜景バスツアー」がスタートした。こちらも人気で、毎月一日の発売開始時には一時間もたらずに売り切れてしまう。前述の「工場夜景ジャングルクルーズ」も、毎月十回で約三百人が乗船しているが、三カ月先まで予約が取れない状態が二年半前から続いている。その盛況ぶりは地方へ波及し、室蘭市や三重県四日市市では「工場夜景クルージング」が始まり、今月には北九州市でも工場夜景バスツアーが始まる予定だ。

広がり続ける「夜景観光」のムーブメントは、私の想像を大きく超える広がりを見



第一回日本夜景サミット(2009年10月10日 六本木ヒルズ)

せているが、現在は第二段階に突入していると言えよう。「夜景観光」による経済効果が認められ始め、関係する全国の自治体や団体・民間企業が情報交換や連携を模索し始めたのだ。その代表的な例が、観光庁が後援する「日本夜景サミット」だ。日本全国における夜景観光活性化に尽力する行政、民間企業が一堂に会する場として開催しているもので、二〇〇九年から始まった。滞在型の観光資源としての夜景を、どのように活用し、どのような成果を残し、滞在型観光に結びつけているか、そして地域活性化にど

のように役立っているか等、「夜景観光」に関するあらゆる情報を担当者レベルで共有し、官民一体・新たな商品開発も含めたさらなる地域活性化の実現の一助を目指している。昨年は大阪の「OSAKA光のルネサンス」神戸市「湯西川温泉旅館組合」長崎市「横浜ランドマークタワー・スカイガーデン」の方々が登場し、近年の夜景観光への取り組みや成果を発表した。今年はその第二回目を迎え、昨年末から夜景観光活性化プロジェクトをスタートした「室蘭市」、さまざまな光の祭りを創出している「日光地区観光協会連合会」、今や冬期では千葉随一の四十万人の来場者を獲得している「東京ドアイツ村」、多数の夜景イベントを開催し、毎年前年を上回る集客を得ている「江の島展望灯台」のほか、「全国光とあかり祭実行委員会」「神戸ポートピアホテル」の方々が登場した。さらに、同サミット内では特別企画「工場夜景サミット」を実施。室蘭市・川崎市・工場夜景ジャングルクルーズの運営会社の方々が登壇し、ディスカッションを行った。

花鳥風月の月のように、^よ夜景は平安時代から多くの歌人に詠まれ、月を愛^めでる

ための月見台のような建築様式も多数登場してきた。一方、日本は世界でも夜祭りの多い国であり、町を見下ろす山や高台等の地形的特徴や、海外では類を見ないほどの夜間の安全性などから、夜景鑑賞は日本人特有の嗜^{たぐひ}みでもあった。しかし、明治維新や文明開化、そして戦後復興から高度経済成長期までの怒濤^{どたう}の西洋文化流入において、日本人の美意識の極みでもある夜景鑑賞は、すっかり陰の存在となっていた。ただ現在、経済不況が長続きすることで、^よ夜景の価値や魅力が見直されてきたことは、本来の日本の魅力や日本人のアイデンティティをもよみがえらせることになったのだろう。この原点回帰こそ、観光業界にとって大きな契機であり、現在注目される「夜景観光」の大きな原動力になっている。

今後も「夜景観光」がますます広がるはずだが、次なる段階は、本来の日本の魅力や日本人のアイデンティティである、^よ夜景を海外へ発信し、多くの外国人観光客を獲得すること。日本の食や温泉と同様に、インバウンド観光の重要コンテンツとしての地位を築いていくことだろう。

(まるまる もとお)

観光川崎の明日に期待して

川崎市観光協会連合会 会長
 (国土交通省認定 観光カリスマ)

齋藤 文夫

川崎にも観光がある

あの公害都市川崎から新生した姿が今の川崎である。市の観光協会連合会会長に就任した私は、まず川崎市内にある九支部との連携を強化し、新たに^{さむわ}幸、宮前両区に協会を組織して、全地域七区十一協会の会長会議を設置、意見交換のみならず広域的観光の具体的取り組みなどを協議した。その一つの効果として、稲田多摩川と稲田堤両観光協会の協議会が結成され、多摩区全体の観光協力体制が確立した。さらに、川崎にも観光があることを発信しなければならぬ。そのため「ちよつと先、KAWASAKI」の観光ポスターの日・英・中・韓国語版を初めて作製し、県内関係先に配布した。関係者は「えーっ」と驚いたという。

川崎の観光といえば、今も昔も川崎大師。

全国一、二を競う初詣で客を集める川崎大師の存在は、私たちの大きな誇りでもある。しかしそれだけではない。川崎はさまざまなポテンシャルに満ちた街だという認識を、行政や各観光協会そして市民たちが、だんだん意識するようになった。

阿部孝夫市長は、洗足学園音楽大学と昭和音楽大学の二つの音楽大学があり世界的シンフォニーホールを有する川崎を「音楽のまち」と宣言し、フランチャイズの東京交響楽団の定期演奏会を行うほか、世界から多くの音楽家を招致。これで街の雰囲気は一変して、かつて「文化不毛の地」と言われてきた言葉は一遍に消し飛んだ。

市の南北交流や東京・横浜の谷間にある宿命的通過街としての基本的問題は残っているが、確実に産業文化都市川崎に生まれ変わった。

川崎の新観光は工場夜景

川崎は一方で、世界最先端技術の集積する工業地帯。公害都市として持つエコ技術やリサイクル技術は、世界への売り物でもある。

日本を代表する科学技術の集積する川崎。普通では気軽に近寄れない工業地帯を眺めると、特に工場夜景の景観は、初めて見る人には極めて新鮮で生き生きと映る。

しかも日常生活に関係がある企業の生産工程を見ることができたら、もつと身近な興味がわくことであろう。

川崎市と川崎市観光協会連合会共催の写真コンクール展に、多くの工場風景が出品され、入選するようになってきた。

かつて、もくもくと煙を吐き出した煙突も、カラフルに造形された。石油タンクや



新しい観光スポット 工場夜景

工場建物も美しく化粧された。朝・昼・晩、富士山の色の移り変わりを眺めるがごとく、工場そのものが視角により、さまざまに変化を見せるようになった。

特に、屋形船に揺られて海風に吹かれながら運河から見る工場夜景は大変風情があり、全く新しい景観を我々に提供してくれる。寶石のようにちりばめられたライト。

船やクレーンの明かりが揺れる。煙突から赤々と燃え上がる炎。ダイナミックでしかもフレキシブルな生き物を、見ているようにさえ感じてくる。

だから、今まで近寄り難かった工場観光に参加して勉強してみようという人が非常に多くなった。

最近当連合会の発案で、専修大学の学生たちによる産業観光ツアーが企画され、多くの若い世代が参加したと聞く。

多摩区にある大学に通学しながら、南部のＪＲ川崎駅に一度も降りたことのない人たちが参加して、川崎大師を中心に自分たちでコーディネートしたコースを着物姿でガイドしたという。中に入ってみることで、いろいろな

ことが見えてきたはずだ。

工場見学には、まず企業の理解と見学コースの整備、さらに安全性を確保することが必要である。生産工程を見て楽しめる企業でなくてはならない、という制約もある。企業機密もあろうが、できる限り開放してもらい、分かりやすい見学ができるように努力してもらいたいと思う。それが企業のイメージアップにつながり、利用者の購買意欲を高めることにもなる。その意味でできる限りオープンにするよう期待しているが、見たい企業が見られない、それが産業観光の一つの壁でもある。

しかし、川崎市と当連合会が企画した「川崎産業観光ツアー」は、本年度中十回を計画している。ＪＴＢや近畿日本ツーリストなど大手旅行会社とタイアップして、主に川崎北部の人たちに南部や臨海工業地帯を知ってもらおうと計画を進めているが、これは細長い地形である川崎市の市民による南北交流促進のためにも、重要な観光政策だと考えている。

すでに産業観光としては、川崎を代表する企業である味の素、クノール食品、ＪＦＥ、昭和電工、ゼロエミッション工業団地、デイ



川崎工場夜景

シイ（第一セメント）、東京電力、富士通、ベクトリアインテックノロジー、ミットヨ（五十音順／敬称略）などを訪問。

それに加えて名利川崎大師や、大師の蛤（はまなべ）、奈良茶飯、コリアタウンの焼き肉、

かわさき餃子などの名物グルメ探訪。大師（たみきのおう）薪能、ものづくりの技能ルネッサンス、大師風鈴市、競輪、競馬との組み合わせをしたり、川崎港のシンボルである川崎マリエンや、アクアラインの地下緊急避難通路、羽

田国際空港、また首都高大師ジャンクションの工事現場を見学したりして、工場夜景を楽しんでもらうなど、バラエティーに富む企画を次々と打ち出し、好評を博している。

工場夜景ツアーに参加した人たちは、今まで見たことのない光景に、宇宙ステーションのようだと感激に浸ったり、アニメの世界に入った感覚に酔う人や、かつて工場で働いた時代を思い浮かべて感慨にふける人など、見る人ごとにさまざまな受け取り方をしているが、ほとんどの人が、元気づけられた、エネルギーをもらったと喜んでいるという。

最近、日本海に面した風光明媚な観光リゾート米子市（鳥

取県）と川崎市観光協会連合会で、両市の市民交流の推進協定を結んだ。伯耆大山の麓（かふもと）の米子の人たちは、川崎の産業観光に目新しさを感じて、市民交流を申し入れてきた。

産業観光を一過性のブームに終わらせることなく、我々のセッティングによっては、国内はもとより国外からも、関心が寄せられることを期待している。

横浜や東京からも、大手旅行会社が独自で産業観光開発に乗り出し、川崎の工場夜景を探訪しているが、現在はいずれも順調のようだ。

産業公害で悩まされた臨海工業地帯が今や観光対象となったことは、往時を知る人々たちには夢のような話である。

いよいよ羽田国際空港がオープンした

多摩川を挟んで目と鼻の先、言い換えれば川崎の庭先に、いよいよ今秋、世界から人や物が到着する玄関口がオープンした。

こんな地の利を得ることは、めったにない千載一遇のチャンスである。しかも川崎港と羽田空港は車で十分の距離。海と空の一

体化という世界的にも恵まれた環境にあり、この利点をどう生かすかは、川崎の腕の見せどころと言いたい。

現在、対岸になる川崎区殿町の膨大な工場跡地に、神奈川県と共同して、羽田の通関検査業務の機能分担を、またライフサイエンスの国際競争拠点として、最新鋭の放射線治療センター、再生医療分野の研究センターを設置。さらに国際コンベンションセンターやホテルを計画しており、画期的な事業が展開されようとしている。

この際、川崎の弱点である国際ホテルを誘致したり、日本全体の観光総合センターを設置して、来日客をさばく玄関口の役割を果たしたいものである。願わくば、第二の秋葉原のようなアウトレットモールも造り、内外の客を吸引したら、すごく活気づくであろう。

この地の利をいかに生かすかによって、川崎や神奈川の観光は飛躍的發展をするのみならず、あらゆる面で川崎のグレードアップにつながるものと確信している。

江戸の時代から通過街であった川崎を再び繰り返さないためにも、平成の今日、第二の日本開国の玄関口としての重責を、川

崎が果たしたいものと念願している。

観光の基本は郷土愛

川崎は東京・横浜のはざまの都市であり、巨大な両市の間隙を縫って、多摩川沿いに市勢を拡張し、小田急沿線の今の多摩・麻生区を合併して、一九三九年に現在の市域が決定した。

戦前の川崎は、臨海部の工業地域から商業地域、住居地域、農村地域の住み分けがあったが、戦後は中部、北部の農村地帯都市化が急速に進み、東京郊外の住宅地として、東急田園都市線や小田急沿線の住民が急増し、現在人口百四十万を擁する政令指定都市に成長した。

多摩丘陵には、弥生時代の先住民の遺跡が数多くあり、貝塚や土器が発掘されている。奈良時代の大和政権の出先機関である橘樹郡衙跡（高津区末長小高谷戸）、川崎最古の影向寺（宮前区野川）には国指定重要文化財の木造薬師如来像があり、また陶磁器部門での日本の国宝第一号秋草文壺は、夢見ヶ崎古墳（幸区）の出土。登戸出土の三彩骨壺も重文指定を受けている。

大山街道、中原街道の往年の主要道は戦

災を免れたが、街道時代の街並みは失われた。

江戸末期の街並みの東海道は、先の大戦の空襲で一夜にして灰燼に帰し、往時の面影は何一つない。

しかし、生田緑地にある東日本民家集落を集めた日本民家園、多摩区に來秋オーブン予定のアニメ・ドラえもん藤子・F・不二雄ミュージアム（仮称）、等々力緑地の市民ミュージアム、サッカーのメッカ川崎フロンターレの等々力陸上競技場（中原区）、東芝科学館（幸区）、日本を代表するシネマコンプレックス「ラ・チッタデッラ」、ラゾーナ川崎プラザなど、川崎の見どころはあふれている。

南から北まで、川崎の観光スポットは枚挙にいとまがない。

歴史や文化、景観の素晴らしさを知ることと、川崎に住んで誇りに思う街となり、それが郷土愛を醸成する。この郷土愛こそ観光の原点と心得ている。

国内はもとより世界と交流する川崎が、やがて誇りある観光都市といわれる日がくることを夢見て、観光事業に精励したいと思う。どうぞ川崎へおいでください。

（さいとう ふみお）

大阪を「光と水」でブランディング ——水都大阪まちづくりの挑戦

水都大阪推進委員会 アドバイザー

(滋賀大学 理事)

室井 明

大阪における「光のまちづくり」

大阪では、昨年、夏から秋にかけて「水都大阪2009」が開催された。また、十二月には昨年で七年目となった「OSAKA光のルネサンス」が実施され、「光」にかかわる二つのイベントで合計約五百万人もの来訪者を招き、「光と水の大阪」を内外に印象づけた。

大阪における「光のまちづくり」という活動がどういう背景でスタートしたのか、どのような体制で推進・展開されているのか、また、その成果と課題は何かなどについて説明する。

グローバル化が進展するなかで、今や都市間競争の時代に突入したといわれており、特徴のない都市、情報発信力の乏しい町は、国際競争力を失っていく。各都市は街の活

力を維持していく上で、個性あるアイデンティティーや街の魅力を構築・発信することが求められており、歴史的・文化的資産の活用や、特色あるコンセプトを持った開発の推進などその存続をかけた活動を行っている。大阪も、経済的停滞状況から脱却すべく、自らの都市の魅力を再認識し、情報発信力のあるまちづくりを推進していく必要に迫られている。

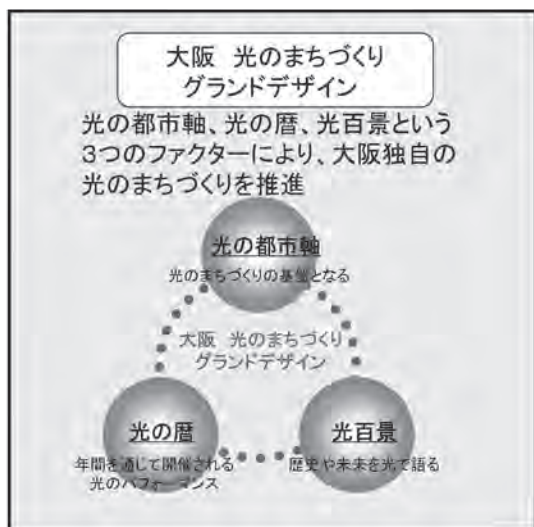
お笑い、タコ焼き、タイガースというステレオタイプの大阪がメディアにより刷り込まれているが、元来の大阪は有形無形の歴史的資産を多く有した文化都市であり、文楽、歌舞伎、落語等の伝統芸能に加えて、大阪の新たな魅力を創出すべく「光」の活動をはじめさまざまな取り組みが開始されている。

二〇〇二年に、大阪府、大阪市、関西経済連合会、大阪商工会議所等の行政、経済

界のトップで構成される「花と緑・光と水懇話会」が設置され、そのコンセプトが提言としてまとめられた。この提言では、二一世紀の大阪の都市づくりの方向性として、「都心機能の再構築による水都の再生」「花と緑・光と水のまちづくり」「人が主役のまちづくり」「ビジターを視野に入れたまちづくり」という柱が打ち出された。

その中で「光」は中心的なポジションを占めており、同懇話会の下部組織として「光のまちづくり企画推進委員会」が設置され、「光」の検討が開始された。同委員会は、照明の専門家、まちづくりの専門家、企業人、行政人、NPOなど幅広い分野の実務者から成り、光のまちづくりの構想づくりから実現のための方策に至るまで議論された。

①インフラストラクチャーとしての光、②祝祭空間（イベント）としての光、③観光



「大阪 光のまちづくりグランドデザイン」



「OSAKA 光のルネサンス」
中之島イルミネーションストリート

資源としての光のプロモーション、に分けてきちんと整理しようという意見が多くの委員から出され議論の結果、「光の都市軸」「光の暦」「光百景」の基本となる三つのファクターを策定した。さらに、都市計画の視点、照明技術の視点を加味し、「大阪 光のまちづくりグランドデザイン」として、大阪における光の全体像を取りまとめ関係者の合意をみた。「光の都市軸」は、いわばインフラ形成論であり、大阪府・大阪市という複数行政の存在、トップの交代などの「逆境」(?)を乗り越えて継続していくことが

成功のポイントになるが、この点は及第点をつけてもいいのではないかと思う。また、「光の暦」は、四季折々の光のパフォーマンスを目指している。とりわけ、冬の光のイベントである「OSAKA光のルネサンス」は、二〇〇三年の初回以降、大阪都心の中之島公園を中心に毎年十二月に実施されており、内容も年々充実し、「神戸ルミナリエ」とともに関西を代表する全国的な光のイベントに成長している。昨年は「御堂筋ライトアップ」と重なったこともあり、来訪者は約三百万人と大幅な増加となった。「光百景」はプロモーション活動であり、

アワード(光の街の写真コンテスト)やウェブによる情報発信、雑誌社・メディアとの連携活動を行っているが、今後は、今以上に大阪観光コンベンション協会や観光事業者等との多重的な協調をとった展開が重要であると思われる。

光と水のコラボレーション

——「水都大阪2009」

次いで「水都大阪2009」について説明する。これは、主としてソフト面からの都市再生がテーマの「花と緑・光と水懇話会」(前述)と、水路・船着き場・河川護岸・水質浄化といったハード(都市基盤)面からの都市再生がテーマの「水の都大阪再生協議会」(二〇〇二年設置)の双方からの「提言」を受け、オール大阪の取り組みとして実施が決定された「新しいまちづくりイベント」である。「新しい」という言葉には、従来の博覧会タイプではなく、市民が主体的に参加するまちづくりを目指すという意味が込められている。

大阪は、難波津なにわづの時代から「水の都」であった。天下の台所といわれた江戸時代、そして近世に至るまで、縦横に巡らされた堀川が

都市の物流を支えてきた。「水都大阪2009」は、そのよ
うな大阪の歴史を踏まえ、人
間活動の場としての「川」をい
ま一度見直し、美しい「水の都」
の復興を広く伝えようという
プロジェクトである。大阪は、
幾度も淀川の氾濫はんらんに苦しんだ
が、明治時代に、洪水から解
放すべく新淀川開削工事が計
画された。二〇〇九年は、この



「水都大阪2009」天神橋ライトアップ
灯籠をイメージした光で橋梁のエッジを彩る



「水都大阪2009」錦橋ライトアップ
水を連想させる青色が美しい



「水都大阪2009」水都大阪灯明
参加型ワークショップにより制作された灯りの地上絵

大工事が完成し、現在の大阪の水路の骨格
が形成されてから百年目に当たる年である。

「水都大阪2009」の大きな特徴として
は、「官民一体となって取り組む大阪の再生」
「推進エンジンとしてのアートと市民参加」
「光と水のコラボレーションによる水都大阪
の発信」が挙げられるが、前二者は別の機
会に譲るとして、ここでは三つ目の「光と水
のコラボレーションによる水都大阪の発信」
について述べたい。

大阪都心には、「水の回廊」と呼ばれる口
の字形の河川が埋め立てられずに残ってい
るが、ここに架かる橋は、「浪速八百八橋」
と言われるように大阪の名所でもある。橋

梁のライトアップは本来インフラ工事とし
て実施すべきものだが、天神橋、難波橋、
錦橋という大阪を代表する三つの橋の照明
が「水都大阪2009」の中で実施された。
橋梁ライトアップは、「光のまちづくり企画
推進委員会」の取り組みとも連動した活動
で、これにより大阪にライトアップの名所
が新たに出現した。特に、天神橋、八軒家
浜、天満橋に囲まれたエリアには、建築家・
安藤忠雄氏が提案した「中之島公園・剣先
の噴水」もあり、大阪の夜の景観の絵に
なるポイントである。

橋梁ライトアップは常設だが、期間中の光
の演出としては、「ナイトプログラム」あか「灯り

プログラム」がある。八軒家浜でのナイトプ
ログラム「水の回廊 時空の架け橋」は、人
気プログラムの一つで大きな集客効果があっ
た。また、中之島公園では、水都大阪灯明とうみょう、
希望の灯り、ミラーチップイルミネーション、
ひかりぶねWS（ワークショップ）、星の木
漏れ陽など、実に多彩でインパクトのある「灯
りプログラム」が実施され、「夢の島中之島」
を演出した。これらは、橋梁ライトアップと
相まって、「光と水の大坂」を来場者の心に
アピールした。「水都大阪2009」は、会
期中に当初のめどを大きく上回る百九十万
人もの来場者を得て、多くの人が「水の都
大阪」を再認識・再発見するとともに、「水

都大阪のブランディング」が発信できたのではないかと思う。二〇一〇年からは、前述の「花と緑・光と水懇話会」と、「水の都大阪再生協議会」の二つの組織も一体化され、官民一体となって、継続・継承と新しい展開に向けた取り組みが始まっている。

今後への展望と課題

順序が逆になったが、「なぜ大阪で光か」について触れておきたい。

歴史を見れば分かるように、光と人類の付き合いは深い。夜の安全・安心の光から始まり、治安維持の光、祝祭の光など時代に応じ、光とはさまざまなかわりを持ってきた。一九〇〇年のパリ万博ではエッフェル塔の二万個の照明が会場の人々を感嘆させたし、日本においては、一九〇三年（明治三十六年）に大阪で開催された「第五回国内勧業博覧会」で、わが国初のイルミネーションが実施され、世界各国からの来訪者を魅了した。国内勧業博覧会については、和辻哲郎が、その自叙伝で「魂をうばわれるような思い……」と記しているほどである。また、一九九五年には大阪で「世界夜景会議」が開催されたが、このように、

大阪は「光」とかわりを持ってきており、二〇〇二年に突如として「光」が登場したわけでは決してない。ここ十年来の取り組みの大きな特徴は、「光と水」の組み合わせであり、「水都大阪のブランド化」である。水に映える光は格段に美しい。大阪の都市戦略としてこの点が大きなアピールポイントになるはずである。

今後への展望と課題を以下の三点に取りまとめた。

一点目は、「継続・継承」の重要性である。まちづくりには当然のことだが、継続継承が大事である。前述のように、大阪では「光と水のコラボレーションによる水都大阪」を目指して官と民が協調した活動が継続されており、喜ばしいことである。「水都大阪2009」では、「水都大阪」というブランド力が形成されたが、今後、それをどう継承・発展させ、街の活性化に生かしていくかの叡智が求められている。

二点目は、「都市戦略・産業戦略」としての光である。光は観光資源ととらえても魅力的である。今、インバウンド観光の重要性がいわれているが、東京、京都と比較して通過観光客が多いといわれる大阪にとっ

て、光の魅力は戦略的にもいま一度整理する必要がある。具体的な一例として、「水都大阪2009」で脚光を浴びたアート船「ラッキードラゴン」の活用も狙い（せじょう）に上つてよい。また、欧州の都市や企業には、「光のまちづくりのノウハウ」を海外に売り込もうという動きもあるが、グローバルな産業戦略としての光という視点も大事である。

最後は、「光」は美しくなければならぬということである。「光」は、インフラとしてのライトアップも、光による祝祭空間演出も、都市の魅力創出への貢献が大いに期待できるし、観光資源としても有効である。しかし、単に明るいだけの光は、周辺との不協和音を発生させるだけでなく、「光公害」の源ともなる。灯明、電球、LEDという熱源を問わず、「美しい光」が基本である。世界一の光の都市であるフランス・リヨン市では、単に歴史的建築物をライトアップして見せるという発想ではなく、人々に感動を与えることをテーマとして取り組んでいる。美しい光に彩られたライトアップや演出照明を楽しんだ後、リヨン市で聞いた「街はキャンパス、光は絵の具」という言葉は印象的であった。（むろい あきら）

街路の光環境によって街はどう変わるか？

ぼんぼり光環境計画株式会社 代表取締役

照明家・工学博士

角館 政英

人の生活と光

近年、私たちの生活は多様化し、夜間に活動する機会も多くなった。生活のリズムも変わり、コンビニエンスストアやレンタルビデオ店も二十四時間営業が当たり前、健康のためのウォーキングもはやっている。日本の多くの街では、安全で安心できる光環境とするために街路照明に関するいくつかの基準に基づいて防犯灯・街路灯の整備を行ってきた。ところが、少ないカテゴリで分類された照明基準では、街路のさまざまな状況に対応できていないのが現状だ。歩行者に対する道路照明の代表的なJIS基準では、街路は四つにしか分類されていない。もっと地域性や場所性を考慮した概念によって多様な計画があってもいいはずである。にもかかわらず、ただ明るくするこ

とが経済的発展の象徴としてとらえられている一面もうかがえる。

本当に豊かな光環境とは何だろうか。それはそこに住む「人々の生活」が感じられる環境を創ることである。ここで言う「人々の生活」とは、人にはそれぞれ個々があり、個々が集まった家、そして家が集まったものが街とすると、当然この各街には個性があるはずである。今までは個性を歴史や土地性などから抽出してきたが、その街に住む人々にとっては新しいシンボルでしかなく、うまくいっている例が少なく、特に無理やりにシンボル性を高めた例は失敗しているとしか言いようがない。「人々の生活」とは必然的に人が存在し、これらを可視化することはその街のアイデンティティー（個性）を増幅させ、歩けば発見があり面白い街を自然に創り出せると信じている。

街の魅力って何だろうか？

街路照明が目立つ街と街並みが目立つ夜の風景を比較してみる。多くの街では、道路に沿って照明が等間隔に配置されているため、道路が目立っている。その結果どの街も似通った雰囲気となり、街の持つ個性や魅力が見えてこない。その反面、道路が狭く、道路上に街路灯を新設することが難しい街では、照明が建物に沿って配置されているため、街並みがよく分かり、そこからその街らしさや「人々の生活」がにじみ出て、親しみのある街路空間となっている。すなわち街路灯を設置しているルール（法則）が見えてくるのである。

照度や均斉度を効率よく確保するために設置された街路灯は連続的な光がシンボリ化され、建物のルールに従って配置された

街路灯はその街並みが目立つという当たり前の現象が起きている。これらはそれぞれ魅力を持つているはずなのに、街並みが目立つ夜のほうが魅力的に感じられる。

横浜「元町仲通り」での試み

——街並みがよく見えて
安心な光——

現在の光環境では、夜の街路に対する不安やストレスは解消されていない。ここで肝心なのはただ「明るい」ことではなく、不安な所が「見える」ことなのではないかという疑問からスタートした。街路空間のどんな所に不安を感じるか、その内容をしっかりと見て取れる、すなわち認知できるかを研究した結果、一つの答えを見つけ出した。建物同士の隙間^{すきま}など歩行者の死角になる所に光を置いて空間認知をしやすいとしてあげると、街並みがよく見え、おのずと街の個性も出てきた。

横浜市の元町仲通りでまずは現状調査を行った。結果、道路上よりも街路周辺部に存在する奥まった空間（以下、ポイドと呼ぶ）に対するストレスが顕著に見て取れた。そこで、元町仲通りでの不安感やストレス



写真1 現状モデル：防犯灯点灯
路上が明るく照らされている



写真2 提案モデルの実験：門灯+ポイド照明(防犯灯消灯)
街路の輪郭が照らされているのが分かる



写真3 防犯灯主体の光環境（現状）：道路は明るいけど周辺部に暗がりを感じる



写真4 行灯による光環境実験：防犯灯の代わりに行灯を街路周辺に設置すると街並みがよく見える

を軽減させる光環境を導くために次のような実験を行った。

●モデルを利用した実験

街路の模型を作成し路上が明るく照らされている状態と、ボイドを明るくし街路の輪郭が照らされている状態を作った。結果、門灯や玄関灯にボイド照明を追加したシミュレーションでは、街路に対するストレスが明らかに少なくなった。(写真1、写真2)

●実際の街路における実験

実際の街路においてボイドに行灯あんどんを設置し、防犯灯を消灯した状態の光環境を創り出す実験を行った。全体的に現状の防犯灯が点灯している状態より行灯を設置した実験時のほうが、不安感は減少する傾向が見られた。また、元町通り利用者を対象としたアンケート結果では、現状とボイド照明を設置した光環境を、明るさ感、安心感について比較してもらった。その結果、実験時のほうの評価が高くなり、街路の見通しや街並みの見え方も、顕著に見て取れるほど良くなった。(写真3、写真4)

この概念は道路上を明るくするというこ

とから、街路周辺である街路空間を分析して、その特性に合わせた光を民地側に設置することによって得られる新たな手法の提案と言える。

岩手県大野村（現・洋野町）

での試み

——まちづくりとしての街路灯整備——

大野村ではまず、夜間歩くことに対する住民の意識調査から始めた。人は歩行中、溝につまずかないかなどの路面の状態だけでなく、街路の周辺部に存在する奥まった空間に対して不安感やストレスを抱えていることが明らかとなり、人の犯罪に対する不安感はなかった。計画としては路面上の明るさ感を確保するよりも、街路周辺に点在する暗闇であったボイドの不安感やストレスを軽減させる光環境を導くための実験を行った。

●実験結果

ちょうちんや行灯などを使ってボイドを照らすという、元町通りで行った同じ手法で新しい光環境を創り出す実験を行い、

不安感やストレスなどの主な原因となる二つの項目について評価した。元町通りと同様に、現状と比較して実験時のほうが全体的に不安感が軽減することが確認できた。また住民の明るさ感に関しては八〇%以上の人が実験時のほうが明るいと感じ、歩きやすさに関しては大半の人が実験時のほうが歩きやすいと感じていた。

これらの実験結果を踏まえてまちづくり整備としての実施設計がなされ、大野村の光環境が完成した。計画当初、大野村中心部の約三十灯の街路灯を整備する予算が確保されていた。私の提案は「小さな光を必要な所に最小限に配置する」といった概念であったので、一灯当たりの単価が低いこともあり、当初の予算内であると、結果として数キロに及ぶ街路を整備することになった。住民の負担する電気代も約一・五倍程度と低く、費用に対して最大限の効果がもたらされたと信じている。また、この光環境の効果を出すためには民地内への照明灯の設置が不可欠であったが、この難題に対し、照明実験を行うことで官民に理解を得ることと、何より一番努力していただいたのが



写真5 街路灯整備
民地内に庭園灯が設置され、官民境界の概念をなくした結果の夜間景観が実現できた

役所の方々に、住民の一軒一軒を根気よく回り説得してくれたことが、計画が実現化できた理由である。

完成後、この夜の風景を気に入った人が多く、わざわざ遠回りしてこの街路を通る人がいたことは事実である。(写真5)

まちづくりとしての光

元町仲通りや大野村で行ってきた計画は住民の参加なくしては不可能なことであり、より深く理解してもらい、なおかつ自ら街につながるものを得てもらえなくては実現化できない。ここで、なぜに光か

ということを説明したい。光の大きな利点は路面整備などに比較すると整備にかかる費用が少なく、その割には整備した効果が得られる点である。特に大野村では今回の光環境整備事業が発端となり、住民によるまちづくり委員会が発足し、今ではさまざまなイベント、空き家や空き地利用の提案や整備を自主的に行っている。そしてもう一つ大事なことは、光を考えるということは自分たちの生活のスタイルを再確認することでもあり、自分の街を再認識する機会ともなる。新しい街路整備の計画案を何枚見せられてもピンとこないが、光は経験的に理解しやすい。私は、これらの利点がうまく重な

り合うように調整しながら進めることができた結果、現実の計画として成功したのだと思う。

今後の課題

先に述べたように、今後は「仕様設計から性能設計」への移行が求められる。特に光は「人々の生活」が街ににじみ出て、地域性を生かしやすい最善の手法と言えるのではないだろうか。住民が選択できる、誰でも理解しやすい価値観の共有や制度としての確立も必要である。照明の場合、電力会社との協力も不可欠である。大野村の場合、民地内に設置した庭園灯は公衆街路灯として扱ってもらえた。また、その地域の人の活動（アクティビティ）に合わせた時間のオペレーションも今後提案していきたい。女性が深夜一人で歩く時は一番に防犯性が必要になり、逆に人がまだ起きている時間帯では防犯性は低くてもいいからである。

光を計画することは、実はマニュアルに従ってはいかない要素が多分にあり、今後、各方面での素晴らしい事例を蓄積して、日本独自の夜間の景観を構築していきたい。

(かくだて まさひで)

スクリーンツーリズムのビフォー・アフター ——誘客効果の継続に向けて

財団法人日本交通公社 旅の図書館副館長

朝倉 はるみ

観光庁は、二〇一〇年度「スクリーンツーリズム促進プロジェクト」をスタートさせました。スクリーンツーリズムとは、映画やテレビドラマなどの映像作品に興味を持つ人が、映像作品の視聴やそれに関する情報接触をきっかけとして、映像作品の製作現場（ロケ地）やゆかりの土地、原作に登場する土地、原作者の出身地や居住地等を訪ねる旅行をいいます。フィルムツーリズム、シネマツーリズム、ロケ地巡りといった言い方もあります。マスコミが、ロケ地や原作・作者にゆかりの土地を取り上げる機会も多く、観光客増加や、製作関係者のロケ地長期滞在による地元への経済効果に各地が期待しています。

観光庁は、インバウンド観光促進の観点からスクリーンツーリズム推進に着手しましたが、スクリーンツーリズムは日本人の国内旅行促進にも寄与します。

そこで、今回はNHK朝の連続テレビ小説『ゲゲゲの女房』で話題の漫画家水木しげる氏にゆかりの鳥取県境港市と東京都調布市、そして映画『桜田門外ノ変』のオープンセットを建設した茨城県水戸市を取り上げ、テレビドラマ・映画の放映前後に観光客の誘致と維持のためにどのような観光施策が行われたかを解説します。

そこで、今回はNHK朝の連続テレビ小説『ゲ

ゲゲの女房』で話題の漫画家水木しげる氏にゆかりの鳥取県境港市と東京都調布市、そして映画『桜田門外ノ変』のオープンセットを建設した茨城県水戸市を取り上げ、テレビドラマ・映画の放映前後に観光客の誘致と維持のためにどのような観光施策が行われたかを解説します。

水木しげる氏ゆかりの二市の取り組み

①鳥取県境港市（水木氏出身地）

●ビフォー…『ゲゲゲの女房』放映前
一九九三年、『ゲゲゲの鬼太郎』の登場者（妖怪のブロンズ像二十三体が立ち並ぶ「水木しげるロード」）がオープンしました。当初は寂れかけていた商店街活性化を目的とした事業だったので

すが、次第に水木氏やゲゲゲの鬼太郎のファンが訪れるようになりました。ブロンズ像も徐々に増加、二〇一〇年三月には百三十九体になり、水木しげる夫妻のブロンズ像も出版社から寄贈され

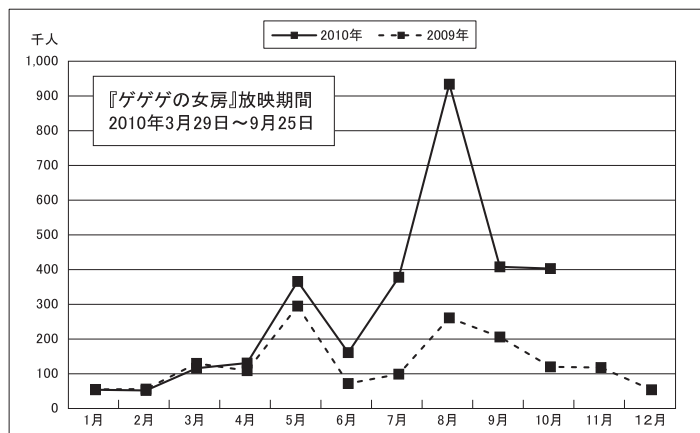
ました。JR境線には一九九三年から「鬼太郎列車」や「ねずみ男列車」が運行され、二〇〇三年には「水木しげる記念館」もオープンしました。二〇〇七年には『ゲゲゲの鬼太郎』の民放アニメ放映と実写版映画公開があつて若年層のファンも増加、ファミリーでの来訪も増加していました。

●アフター…『ゲゲゲの女房』放映開始後

ドラマ放映が始まった二〇一〇年四月以降、「水木しげるロード」への観光客も急増し（図1）、十月末時点で三百万人を突破しました。「水木しげる記念館」も、これまでの最高入館者三十二万人（二〇〇八年）を二〇一〇年は十月半ばにクリアしています。

観光客の大幅増に伴い、「水木しげるロード」の商店の売り上げも増加していますし、境港市に隣接する米子市の皆生温泉（かいけ）も八月は前年より一割ほど宿泊客が増加したそうです。また、もともと水木氏のファンは年齢層が幅広かったの

図1 水木しげるロードの月別入り込み数



資料提供：境港市観光協会

ですが、二〇一〇年はドラマ視聴者と想定される高齢のご夫婦が増えたのです。

境港市は、「水木しげるロード」や「水木しげる記念館」等、二十年近くにわたる資源・施設の蓄積があります。今後、ブロンズ像の増加や「水木しげるロード」延伸の予定はありませんが、イベントやセレモニーなどの話題づくりとその情報発信をこれまで同様に継続していくことが大

切と、市観光協会では考えています。二〇一〇年は特殊な年で、次年度も同じレベルの観光客を誘致することは不可能であり、例えば「水木しげるロード」の入り込み客を二百万人程度に伸ばして安定させることを目標に置くほうが、現実的なのです。また、境港市単独ではなく、広域連携による観光客の滞在時間や泊数の増加を目指すこととしています。境港市には宿泊施設がほとんどなく、ドラマも境港市ではロケが行われていないため、「ロケ地マップ」が作れないのです。そこで、周辺エリア（米子市、鳥根県松江市・安来市等）を含めて「水木しげる夫妻ゆかりの地マップ」を作成し、観光客の流動を促そうとしています。

②東京都調布市（水木氏居住地・ドラマロケ地）
●ピフォー…『ゲゲゲの女房』放映前

水木しげる夫妻は五十年近く調布市に住んでおり、水木氏は一九八八年から現在まで市立図書館だよりの表紙を描いています。ドラマ放映以前にも『ゲゲゲの鬼太郎』キャラクターを市が活用しており、一九九六年には商店街に鬼太郎らのモニュメントが設置され、二〇〇三年には深大寺山門前に「鬼太郎茶屋」がオープンしました。二〇〇九年四月にドラマ放映が決定すると、

調布市は「ゲゲゲの鬼太郎特別住民票」の交付や、市立図書館での水木氏関連書籍の展示ほか、十二月には「ゲゲゲの女房推進委員会」を設置、市民、事業者、行政から約八十人が委員となり、ドラマ放映に向けた情報共有と観光客誘致や受け入れ態勢の役割分担等の話し合いを続けました（二〇一〇年九月に委員会は解散）。

●アフター…『ゲゲゲの女房』放映開始後

二〇一〇年四月には市として初めて「観光マップ」を作成、五月には観光案内所「ぬくもりステーション」を市の玄関口京王線調布駅から徒歩五分の場所にオープンしました。ステーションには、ドラマのロケが行われた深大寺をはじめとする市の観光マップ、ゲゲゲの鬼太郎関連商品の販売、水木氏の漫画原稿のパネル展示、水木氏ゆかりの境港市周辺の大きな観光マップのパネルもあります。ドラマ放映の終わる九月末で閉鎖の予定でしたが、来訪者が五万人を超え（十月下旬までの累計）、来訪者や地元商店街からの要望もあり、二〇一一年三月まで設置を延長することになりました。

市の観光協会は、のぼり旗や横断幕、街路灯フラッグを作成し、市内の商店街や駅に掲示、市全体でドラマ放映を歓迎する機運を盛り上げました。市内主要三駅近郊の七商店会八十店舗

も五月から水木氏の作品パネルを展示する「調布・布田・国領まちなかパネル展」を開催、マップも作成しています。深大寺目的の観光客を少しでも商店街に回遊させるためです。

ドラマのロケ地でもある深大寺の観光案内所の利用者は、二〇一〇年四〜九月は約二万六千五百人と、前年同期の四倍近くに増加しました。深大寺周辺の撮影場所マップ（下図）もお客様からの要望が多く寄せられたことから観光協会が作成し、深大寺のボランティアガイドの申し込みも前年同期の二倍以上に上っています。

調布市は、新選組局長の近藤勇の生誕地でもあり、二〇〇四年にはNHK大河ドラマ『新選組!』放映に合わせ、「大河ドラマ館」等の箱ものを建設、観光客誘致を目指しました。しかしながら、入館料や設置場所へのアクセスの悪さ等の要因が重なり、入館者数は目標の四割程度にとどまりました。

調布市ではこの時の教訓を踏まえ、『ゲゲゲの女房』放映に際しては、マスコミへの情報発信と地元との情報共有に力を入れることにしたのです。市から新聞、雑誌、テレビ、ラジオへのプレスリリースは月三〜四回に及び、ホームページのリニューアルやブログも充実させた結果、二〇〇九年度に比べ二〇一〇年は取材件数も急

増、関東のみならず関西のローカルテレビの取材までありました。

『ゲゲゲの女房』は、十一月に映画も公開されることから、テレビドラマ放映終了後も調布市にはマスコミからの取材が相次いでいます。しかし、テレビや映画等の過熱ぶりはいずれ静まると市の担当課は感じており、今後は引き続き水木氏のキャラクターを活用したまちづくりを継続していく予定です。また、市内に映画産業が集中していることから「映画のまち」と地域イメージを発展させ、PRを強化して、観光客誘致による中心市街地活性化や産業活性化につなげていく構想です。

調布市への観光客は、今年にはドラマの影響で市外や遠方からも増えましたが、深大寺をはじめとした市内の観光資源・観光ルートの魅力から判断すると、「都民」が最大の観光客であり、彼らをリピーターとして確保することが調布市にとって堅実な戦略なのです。したがって、調布市では二〇一〇年五月には新宿駅西口で市の観光物産イベントを初めて開催、二〇一一年一月に

増、関東のみならず関西のローカルテレビの取材までありました。



は東京ドームでの「ふるさと祭り東京」という物産展にも初参加の予定です。

茨城県水戸市

水戸市は茨城県の県庁所在地で、日本三名園の一つである偕楽園や、弘道館（江戸時代の水戸藩藩校）、千波湖等^{せなば}で有名です。

●ピフォー…『桜田門外ノ変』公開前

二〇〇九年は水戸藩開藩四百年に当たり、それを記念して茨城県内の市民団体「桜田門外ノ変」映画化支援の会（二〇〇八年八月設立。以下、支援の会）が発案した映画『桜田門外ノ変』が製作されました（二〇一〇年十月公開）。支援

の会は、映画化だけが目的でなく、映画づくりを通して茨城を再発見する機運の醸成、それによる「まちづくり、ひとづくり」、そして全国からの観光客誘致や地域活性化を目指しています。同会は、国・県・市の補助金を得、市内中央にある千波湖畔に桜田門、壕、大名屋敷等を再現した映画用のオープンロケセットと記念展示館を建設、管理・運営しています（一般公開は映画撮影終了直後の二〇一〇年二月下旬～二〇一一年三月末の予定）。入場目標は六十万人ですが、映画の前売り券に入場料割引券が付いた「製作協力券」を販売したこともあり、十月末までに入場者は十六万人を超えました。

●アフター…「桜田門外ノ変」公開後

支援の会の活動期間とオープンロケセット・記念展示館の公開は二〇一一年三月末までの予定ですが、期間限定のハードを補う意味での観光客誘致策として、写真のような「幕末観光マップ



幕末観光マップ「桜田門外ノ変」
ロケ地&ゆかりの地周遊

布市のようにマスコミへの情報発信

ブ「桜田門外ノ変」ロケ地&ゆかりの地周遊」を作成しました。映画のロケ地等県内三十三カ所を紹介して観光客の県内周遊を促し、また地域資源とスクリーンツーリズムを合体させ、宿泊旅行を定着させていくことも狙っています。また、旅行会社に対して借楽園とロケセット等を組み合わせたツアー造成も働きかけています。

「桜田門外ノ変」は、「県民創生映画」と言われ、動員目標百万人もクリアできると想定されています。映画がヒットすれば、支援の会の活動やオープンロケセットの公開延長の可能性もあるそうです。支援の会の活動継続に向けた一般社団法人化の動きもあります。

最後に…：ドラマ・映画の「アフター」も観光客を維持するために何をやるか？

テレビドラマや映画による観光客の増加は観光地にとって喜ばしい限りですが、その効果は長続きしない場合が多いのです。マスコミは、常に新しいドラマや映画に関心が移るため、放映・公開後は、マスコミによる情報発信量も減少してしまつたためです。したがってドラマや映画の放映・公開後も境港市や調布市のようにマスコミへの情報発信を継続することは、観光客を維持するための基本と言えるでしょう。ハード・ソフトを問わず、地元の話題を作る、あるいは見つけ出して、絶えずマスコミの関心を引きつけることです。

また地元の観光資源の魅力をも過大評価することなく、周辺地域との連携も取り入れて、周遊エリアの拡大、あるいは観光客の滞在時間を増加させることで、観光地の賑わいや経済効果を拡大させるといった方法もあります。今回取り上げた三方所も、観光客の周遊促進のためにマップを作成しています。

ドラマや映画で構築された地域イメージ以外にも地域の魅力があれば、それを活用することも可能です。調布市は、テレビドラマにより「調布市―深大寺―ゲゲゲの女房」というイメージ連鎖が定着したので、今後は「映画のまち」というイメージも浸透させていこうとしています。

境港市は漁業のまちでもあり、今後は観光と漁業との連携を強化すべく、境港市の観光ガイドマップにも「さかなと鬼太郎のまち境港市―境港・カニ水揚げ日本一」とうたっています。観光と他の地場産業が連携することは、新しい旅行需要の開拓にもつながるでしょう。

(あさくら はるみ)



連載 I
あの町この町
第 40 回

金魚島周遊 —— 山口県周防大島町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト＝著者)

山口県の周防大島はよく「金魚島」といわれる。島の形が似ているからで、丸まっこの胴に尾ビレのやたらに長い金魚がいるが、あれとそっくり。しかも背ビレや腹ビレ、尻ビレに相当する出っぱりもそなえている。地図によっては町役場の所在地が◎で示しているが、それがまた金魚の目玉にピッタリ。口と下アゴを思わせるトンガリまである。

旧称を屋代島やししろといつて、瀬戸内海では淡路島、小豆島について三番目に大きい。東西約二十八キロ、南北二十四キロ、面積一八三平方キロ。ながらく山口県大島郡下にあった、久賀、大島、東和、橘の四町だったが、平成十六年（二〇〇四）に合併して郡が消え、周防大島町が誕生した。

島であるが雄大な鉄骨の橋で本土と結ばれている。山陽本線大島駅前からバスが出ていて、金魚の鼻孔から背を撫でるように

して島に入っていく。

未知の土地を訪ねるとき、たいてい何か一つ手がかりになりそうなものを用意していく。周防大島では石風呂だった。風呂といっても湯につかるおフロではない。石積みいしづみの室を柴やソダなどで熱くして海水でぬらした海藻やムシロを敷き、その上で休む。サウナと同じで全身が発汗して休養とストレス解消、また親睦や娯楽の用もはたす。

かつて瀬戸内海沿岸の島々にひろく石風呂が普及していた。寺院にそなわっているケースもあった。『あるくみるきく』249号（一九八七年）は「瀬戸内の石風呂を訪ねて」の特集にあてられているが、そこに石風呂分布図が掲げてあって、数により市町村別に色分けされている。周防大島がとりわけ色濃いの、島のいたるところに石風呂があったからだ。

写真では、多くが半円球状に石を積んだもので、出入り口がポツカリあいている。すきまに粘土をつめたのだから、全体が草で覆われ、小さな円噴のように見える。岩のへこみを利用し、掘りひろげて室にしたのもあった。

石風呂を手がかりに考えたのは、そこかいろいろひろがつていくからだ。半円球に石を積むには特殊な技術が必要だ。わざわざプロの石工を招いたりしないから、自分たちでこしらえた。島は平地に乏しい。山の斜面に石を積み、一寸刻みて棚田をひらいた。米作りには水がなくてはならない。暗渠を掘って水を導き、用水路をわたして、どの棚田にもまんべんなく水を行きわたらせる。すべて土地の人が自前でやった。おのずと石風呂の島は、高度な石工技術をやしなってきたところと考えられるのだ。

金魚島の背ビレの辺りが旧久賀町で、この八幡地区にみごとに石風呂がのこされていた。半地下式で巨大な饅頭のようにモッコリしており、花崗岩を積み上げ、赤土を詰めて仕上げをしたそうだ。頑丈な上屋が全体をつつんでいて、となりの建物が休息に使われた。八幡の石風呂のことは江戸初期の文書にも出てくるという。古い絵図にはすぐそばに薬師堂があり、「お薬師さんの石風呂」と呼ばれていた。現在は国の重要有形民俗文化財に指定されている。

そのせいか出入り口が仕切ってあって、中に入れない。使われなくなっただけに、なるらしく、全体がじめついで、カビた匂いがする。床面も赤土でかため、中央に排水孔が設けられていたようだが、小さな入口の奥はまっ暗で何も見えない。

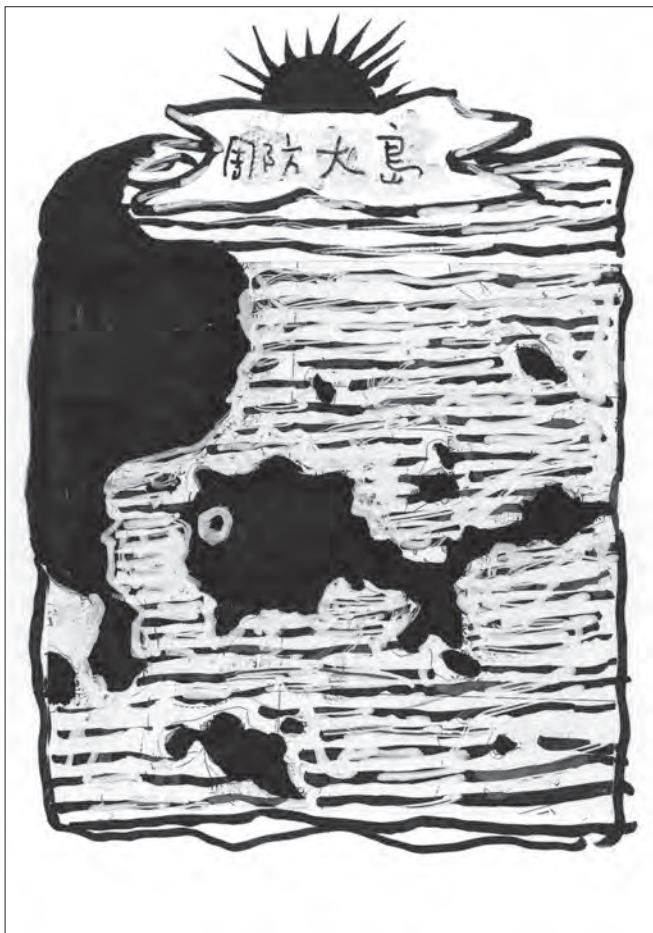
旧久賀町は、幣振鼻と大崎鼻の出っぱりをもつ港町として、早くからひらけたところだ。背後に周防大島でもっとも高い嘉納山（六八五メートル）が控え、山頂近くまで段々畑がせり上がっている。現在は一面のミカン畑だが、かつてはみごとに棚田の景観を呈していたにちがいない。そして久賀町はまた古くから出稼石工の町として知られていた。海岸の築造、道路改修、棚田づくり、水道構築……。その足跡は中国地方

から北九州、さらに朝鮮やハワイにも及んでいた。

専門の石工だけではない。誰もが石工技術を身につけていた。そうでなくては暮らしていけない。急峻な土地に石積みをしており、大雨や陽照りのたびにドッと崩れたりする。農閑期の棚田の修理は、農家の人の大切な仕事だった。八幡地区の民俗資料館には農作業のための道具類とともに、さまざまな石積み用具が保存されている。あ

ちこちに点在する農小屋には鋤や鍬とともに、必ずゲンノウなどの石割り用具が置いてあった。

さきほどあげた『あるくみるきく』石風呂特集を担当した印南敏秀さんは、丹念に島を歩いて調べてまわった。四半世紀前のそのころは、まだところどころで石風呂が使われており、火を燃やすことから、焚き上がったあとのワラや菖蒲の水かけ、ゴザを敷いて準備がととのうまでを見物する



金魚島

ことができた。

「まちかねたように、古老たちが枕を投げ入れ、普段着のまま入ってゆく」

入り方にコツがあつて、頭を下げ、肩をすぼめ、這うように入る。奥にいくほど熱いので、入口近くで頭を口に向け、体を折つて姿勢をできるだけ低くする。すわるのは少し冷めてからのこと。

中から誘われて印南さんはへつぴり腰で入つていった。緊張と熱気ですぐに汗びっしりになり、早々にとび出した。

「中では古老たちが寝そべって平然としている」

石風呂は焚く技術はもろんのこと、入つてたのしむにも経験がものをいうことに気がついた。

島のうちでも主に旧東和町を調査の対象としたところ、現存する八カ所のほかに、以前はさらに十カ所あつたことが判明したという。当時の戸数三千五百戸弱でそこに十八カ所、ほぼ二百戸に一つの割りで石風呂があつたことになる。

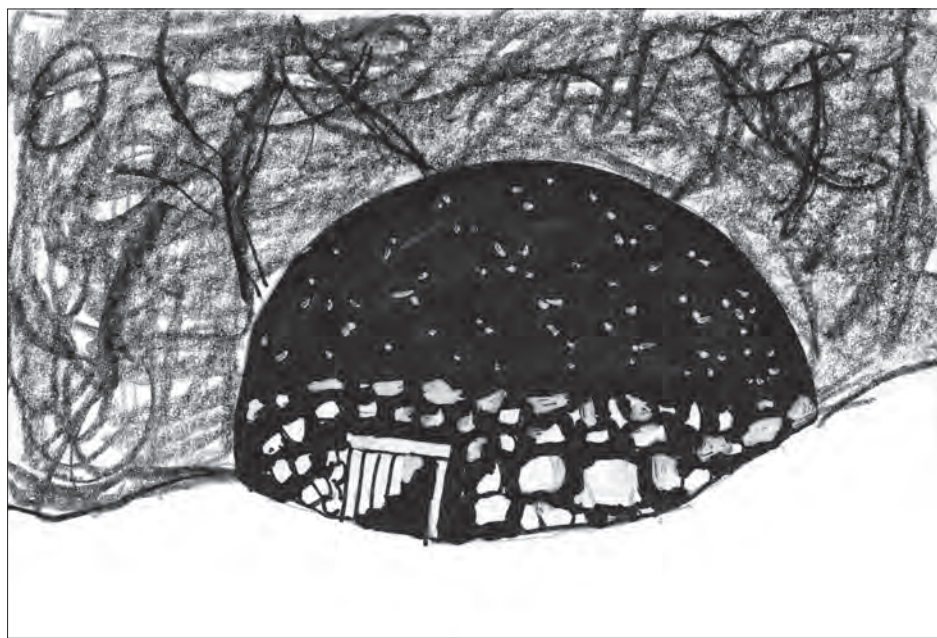
形は饅頭形の半円式か、山肌を室をつくる横穴式のどちらかで、内部はドーム状か、四角な側壁スタイル、あるいは両者の組み合わせ。どの場合にも火に強い切り石や割り石をあてがい、決して崩れない技術力で

保証されていなくてはならない。

周防大島の旧東和町は民俗学者宮本常一つとむち（二九〇七—一九八二）の生まれた町である。

「歩く見る聞く」学者といわれ、日本列島の隅々までくまなく歩き、生活に根ざした独自の民俗学を築き上げた。晩年は若手のための場をつくり、その機関誌として『あるくみるきく』を発行。石風呂特集が組まれたのは宮本常一没後六年のことだが、若い研究者の一人印南敏秀は、より親しく師の生地を知るためにも、東和町を足まめに歩きまわつたのかもしれない。

東和町森、同小積、同平野、同油宇、同西方……。今なお、石風呂は点々とちらばっているが、ある一つは表土が崩れかけ、入口が草で覆われていた。内部が崩壊して切り石が散乱していたり、まつ黒に焼けただれ



ドーム型の石風呂

た内部がもろくなり剥落をはじめたものもある。道をたずねても人々の記憶からも消えかけている。石風呂がしだいに使われ

なくなつたのは、ほぼ昭和三十年代のこと。「所得倍増」を合言葉に、日本経済がまっしぐらに高度成長へと駆け出したときであつて、はじめはゆるやかに、ついで急テンポに人口移動が始まつた。地方から大都市への人の流れは、もはやとどめようがない。周防大島の人口が減少に転じたのもそのころからで、新しい経済構造の成立とともに伝統的なサウナのたのしみが捨てられた。

島の旧四町のうち、久賀、大島、橋の三町が金魚の丸まっこい胴を三分する形で、



岩壁型の石風呂

東和町は尻ビレにつづく二つの尾ビレにあたる。その一つは長々とびて、先端が瀬戸ヶ鼻。もう一つの尻ビレの先っぽに沖家室島があつて、橋で大島と結ばれている。尻ビレに近い下田の民宿で一泊、沖家室でもう一泊。それでわかつたが、本土と橋つづきとはいへ、旧東和町から大橋はいぜんとして遠いのだ。旧来の定期船で四国に出る方がうんと近い。一つの島であれ、江戸のころから旧三町は西の長州と、あとの一町は東の伊予と結びついてきた。石工のほか

に宮大工、家大工としての出稼ぎが盛んだつたが、旧東和の人たちは主に四国山地へ出かけ、その地に住みついた人もいた。宮本常一の名著の一つ『忘れられた日本人』に「土佐源氏」と題された章がある。所は土佐の山中の橋原村。イロリに

火がチロチロと燃え、そばに八十をこえた盲目の小柄な老人があぐらをかいてすわっている。

「あなたはどこかな？ はア、長州か。長州かな、そうかなア。長州人はこのあたりはえつとときておつた」

聞き書きをとつたとき、宮本常一はこの「長州人」が実は自分のふるさとだと即座にわかつたようだが、かまわず老人のひとり語りをつづつていった。同じ一冊の聞き書きのなかで「土佐源氏」一つがめだつてちがう書きぶりになっており、聞き取つたところの「真実」をめぐつて学者間に論議があるようだが、つまらない学問的イチャモンというものである。聞き書きに一貫している、せつばつまつたまでの濃密な信頼の情が本来の中身というものだ。老人の話を聞きながら宮本常一は、暮らしのために島を出て四国へ渡つてきた同郷人を思っていたにちがいない。目に見えぬその人々の声を聞くようにして盲目の老人を見つめていたのはなからうか。

沖家室は本浦、州崎の二つの集落から成り立っている。翌朝、民宿の主人に案内されて海沿いに弓状にのびる商店通りを歩いていった。昭和初期から戦後にかけて本浦には四十一軒の店と三つの造船所があつた。

現在は雑貨屋一軒と郵便局だけ。州崎には四十五の店と二つの造船所があったが、ここごとくが廃業、通りにはどこまでも無人の家が並んでいる。

医院、銀行、ラジオ屋、畳屋、豆腐屋、酒店、文具店、釣鉤屋、理髪店、旅館、風呂屋……。のこされた看板や店がまえが、旧の商いを伝えている。八十軒あまりを数えたのは、それだけの住人が島にいたからで、最盛期には三千人をこえた。現在はその一割、いや、正確には一割のまた何割かにとどまる。過疎というなら、まさに壮絶な過疎状態というほかないだろう。ノンフィクション作家佐野眞一が『大往生の島』として取り上げたのは平成九年（一九九七）である。

「……沖家室の高齢化率は日本全体の高齢化率の四・七倍に相当する七・二パーセントにも達している。この島の百七十九世帯二百六十三人のうち、実に十人に七人以上が六十五歳以上のお年よりで占められている」それから十数年、世帯数は三ヶタから二ヶタにへり、高齢化は十歳分をはるかに上まわる率で上昇した。そして沖家室にも二つばかり石風呂があったが、いつのころからか忘れられ、今はもう土に埋もれたという。この蒸気風呂は地域の共同体があつてこそ

使われ、維持されるものであるからだ。

宮本常一は晩年、故里にもどり、さまざま地域振興の活動をした。その一つが生産用具の収集で、呼びかけに応じて地元有志が集めたのが一万五千点にのぼり、そのうちの二百点あまりが周防大島文化交流センターに展示されている。

大きく分けて稲作、養蚕、紡織、ミカン栽培にあたり、それぞれの用具が、島の暮らしの変化をあらわしていた。かぎられた土地の米作りが、多くの出稼ぎ職人の伝統を生み出した。ついで養蚕が急成長して、稲田がいつせいに桑畑になった時代、つづいては反あたりの収入でミカンが有利となり、桑畑が姿を消して、いつせいにミカン畑に切り替わった。いずれの場合も生産過多に陥って卸値がガタ落ちをした。

沖家室もほぼ同じような変化をみせたようだが、ここでは米、蚕、ミカンのあいだに漁がはさまる。江戸のころ阿波から一本釣りの漁法が伝えられた。島の周辺がタイやハマチの好漁場で、たちまち瀬戸内海有数の一本釣り漁の島になった。明治から大正、さらに昭和五十年代ころまで「家室船」と呼ばれた船団が国内はもとより朝鮮、台湾、中国、ハワイまで出漁、各地で「分村」をつくり、そこに住みついた。大浦に入るとっ

かかりのお宮を蛭子神社ひるこというが、玉垣に寄付をした人の名前と在所が刻んである。ホノルル、カナダ、奉天……。

「高雄——台湾ですね」

民宿の主人が一つ一つ、手で示していった。義州、鎮南浦は北朝鮮、安東は中国、仁川は韓国、タイやベトナム組もいる。

町役場のある旧大島町には「日本ハワイ移民資料館」があつて、周防大島の移民の歴史がわかりやすく展示してある。日本政府とハワイ政府間の交渉の結果から募集を始めたので「官約移民」と呼ばれたが、その第一回は明治十八年（一八八五）出発。全国で二十人ちかくがハワイに渡ったが、そのうち四百二十人が山口県人で、さらにそのうちの三百五人が大島郡出身だった。十年分の統計だけでも全国で約三万人、そのうち山口県が三分の一強、その山口県分の半数にちかい約四千人を大島郡で占められている。

沖家室ではハワイにかぎらなかつた。神社の玉垣に見るとおり、その移住先はひろく東南アジア全体にひろがっていた。

その沖家室の大浦に泊清寺という寺がある。宗旨は浄土宗、立派なお堂で、彫り物、前庭の白い玉砂利、よく手入れされた庭と庫裡、全体のたたずまいが雄大で清々しい。

本堂の隅に、ぶ厚い本が並べてあった。『かむろ』といって大正から戦前まで月一度発行の雑誌があった。出身者のためのジャー

ナリズムで、島の現状、出身者の消息を刻々と伝えつづけた。現泊清寺住職が三巻本に復刻、沖家室島の過去をとどめる貴重な資料ができた。

過去だけではない。現在、泊清寺を発行元にして月刊『潮音』が出ている。平成二十二年度（二〇一〇）一月に第六十三号を数え、トビックスを伝えたいときは号外が出る。

「小さな島にもいろんな営みがあり、数多くの人が訪れてきます」

アメリカ、カナダからの旅行者は父親が日系三世、ハワイ州ホノルル市のテレビ局に勤務している。勇んで玉垣に名を刻んだ世代の孫たちが、父祖の地の観光振興のプランづくりをやってくる。やっとわかった、ここを壮絶な過疎地とするのはまちがいだ。いつだったか、移民の多いことで

知られる沖繩の町で、明治時代のリーダーがのこしたスローガンに出くわした。

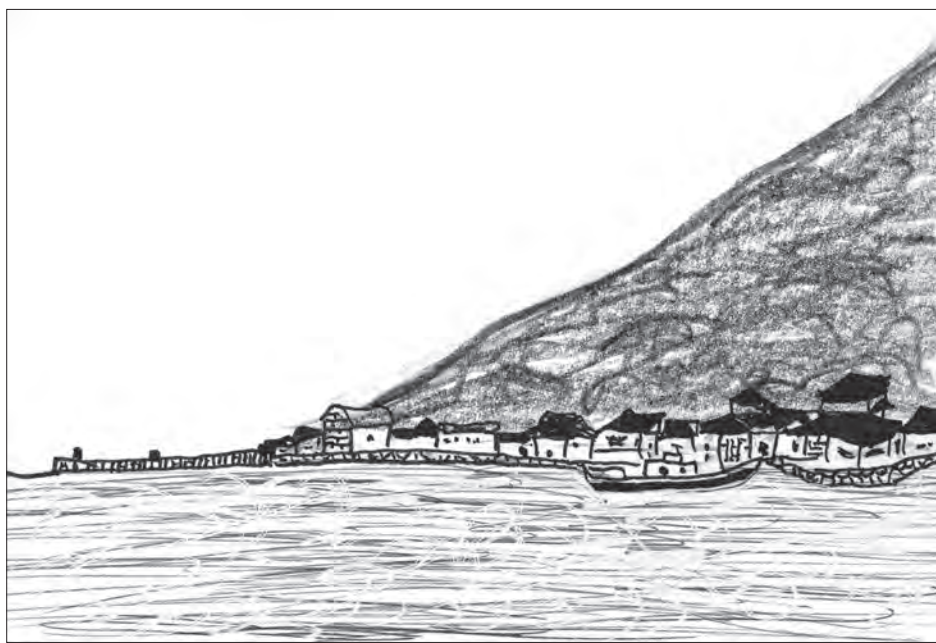
「いざ行かむ 我等が家は五大州」

スケールが大きく、人の心をつかむ夢にみちている。島の分村は文字どおり五大州にちらばり、大浦、州崎の無人の通りにも、目に見えない人たちが往き来している。さびはてた商店の並びなのに少しも暗くなく、閉ざされた玄関に荒廃のあとがないのは、遠くから故里を見守っている無数の目があるからだ。

沖家室のお年寄りにおしえられて島の向かいの地家室を訪れた。集落の背後の山道を少しのぼると石風呂の前に出た。岩場を利用して奥をひろげたタイプで、まっ黒な入口の鉄板の蓋が余熱をのこしている。案内してくれた人によると、つい昨日、久しぶりに風呂が焚かれた。休憩用の建物に、くだもの、おかず、炊き込みごはんが運びこまれ、いちにち人でにぎわったそうだ。

一段高いところに大島八十八カ所巡りの小さな寺があって、かたわらに石の仏が鎮座していた。久かたぶりの人々にかわるがわる撫でられたのだろう、やさしげな仏のおでこと頬が赤らんだような淡い色を受けていた。

（いけうち おさむ）



空堤から沖家室を望む



連載Ⅱ
風土燦々⑬

温泉と茅葺きの神通力(中)

宮城県石巻市北上町

ルポライター

飯田 辰彦

当初、横山宗雄の追分移住は二、三年で終わらせる計画であった。それを思いとどまらせたのが、妙葉の発見だった。つまり、現在の追分温泉の成功を導いた源泉との遭遇である。

それが良質の鉱泉であると判明した時、宗雄はこの薬湯を広く世間に宣伝し、多くの人に利用してもらうことを願った。

「明日も分らない困窮生活でしたから、温泉の発見はまさしく一条の光明でした。でも、その後が大変。開湯の手続きが実に複雑なんです。父は不眠不休で認可取りに奔走しました。あれはもう、意地としか言えないような行動でしたね」

宗一さんの母、宗雄の長女である恵子さんの証言である。骨折りのかいあって、一九四八年(昭和二十三年)の秋に県の認可(旅館業)が下りた。さっそく浴場造りが始まった。石巻から大工を呼び、四尺四

方の木枠に石塊粘土のかまを組み合わせた。鉱泉は金鉱跡の源泉から竹筒で導水した。住家とは別に、裏手に残っていた鉱山時代の廃屋を補修し、客室に充てた。

そうした間にも、一九四九年には義弟一家が女川おながわの谷地に去り、その翌年には赤貧に耐えられなかった後妻が家出していった。一方で、一九五一年には長女恵子が女川から婿養子の良一を追分に迎え、次の年には初孫(代喜江Ⅱ宗一さんの姉)誕生という吉事が続いた。このころを境に、追分温泉は山の湯治場として近郷近在の客に定着し始める。当初、一泊の利用料金は四十円だった。

その後は、高度成長の時代の流れがおのずと追分温泉の発展を後押しする。湯船の拡張、自家発電の導入、一般客用の客室設備、電話開通(七三年)、普通電力の通電(七五年)と、粗末なランプの湯治場でスター

卜した追分温泉からは想像できないような「事件」が続いた。だが、いつぱしの温泉宿に成長しても、宗雄は決して「原点」を忘れなかった。開湯当初、海のものとも山のものとも知れない湯治場にせつせと通ってくれたのは、お湯をこよなく愛する地元客だった。湯治客から離れたら、追分温泉を興した意味を失うと、宗雄は固く信じていた。

「実は、追分を継いだころ、祖父には申し訳ないけど、湯治場のスタイルにコンプレックスを持っていました。ダサイし、惨めつたらしい、と。そんな時、秘湯ブームが起きて、ウチのようなひなびた温泉が目目されだした。そうか、ウチ流、つまり祖父流でいいんだと、コンプレックスから解放された」

と、宗一さんが振り返る。宗一さんは地元商業高校を出た後、仙台の調理師学校で

一年学び、その後は長野や地元石巻で包丁の腕を磨き、二十五歳の時に満を持して追分に戻ってくる。長男でもあり、子供のころから温泉宿の跡取りになる覚悟はできていた。娘婿の良一は経営には不向きと、祖父は当初から孫の宗一さんを後継に目していたらしい。

一九九〇年と九四年に祖父、父が相次いで他界すると、いよいよ追分の命運は宗一さんの双肩に託される。パブルの弾けものかは、すでにこのころ追分温泉は知る人ぞ知る、宮城を代表する人気の宿になっていた。客室は一年を通して常に満室、昼も宴会や会合で広間が空く日はなかった。低



1997年完成の新館をバックに記念のショット。
宗一さんを扶んで、右が母の恵子さん、左が妻の章子さん

料金ながら三陸（海）の幸満載の食事と、地元のお母さん達が仲居を務める素朴さが、旅好き、温泉ファンの圧倒的な支持を受けたのだった。

そうした流れの中で、一九九七年にはレトロなイメージの新館を増築し、老朽化が目立ち始めた浴室を大胆に改装した。離れ風の大浴場は埋もれ木の樞を湯船に使い、天井には北上川名産の茅を葺くという、風情と快適さを両立させた実に見事な造作である。親友の建築デザイナー、渋谷修治さんの協力を得て実現した、宗一さん二世一代の大仕事だった。

「規模は多少大きくなったかもしれませんが、根っここの部分では少しも変わっていない。都会のお客さんも拒まないけど、でも地元の湯治客が満足してくれてナンボ、の宿だと思っています。人に中途半端と後ろ指さされようと、それが、追分流」ですから……」

追分流を指して、宗一さんは、親子三代のロマンとも表現する。文字通りゼロからスタートした祖父の

試みが、地元出身の父が加わることで地域に受け入れられ、三代目の宗一さんになってついに軌道に乗ったということだろう。結果として、宗一さんは二〇〇七年に「ふるさと企業大賞」（地域総合整備財団）を受賞する。これを壮大なロマンと呼はずして、ほかにふさわしい譬えがあるだろうか。

しかし、宗一さんの気持ちの中には、永遠とか完璧とか、また義務といった固い言葉は存在しない。宗一さんほうに、祖父の個人史の内にそうした考え方のむなしさ、また危うさを学んでいる。

「この星のものには、すべて寿命があるんです。だから、一人娘（中学生の恵美ちゃん）に後を継いでほしいなどと、思ったこともありません。三代のロマンで十分です。ただ、地域の未来のことは人一倍心配しています」

私の指定席、自炊棟の一室で、宗一さんの語りが冴え冴えと身に染みる。追分では「永遠」はタブーだが、こうした芳醇な一瞬だけは永遠であってほしいと、つい願ってしまうのだ。明日は、宗一さんとともに、北上の今後の行方を砕くもう一人の主演、熊谷秋雄さんに会う予定。茅葺きを通して世界を股にかける異色のキャラクターだ。その前に、樫風呂でもうひと浴び、命の洗濯をしよう。（いいだ たつひこ）



連載Ⅲ
ホスピタリティーの
手触り61

平和を希求したホテルマン

旅行作家

山口 由美

人と人と、
国と国の機微を読む

創業者の末裔として、これまで私は、箱根の富士屋ホテルをめぐる多くの物語を書いてきた。だが、題材としての富士屋ホテルを面白くしているのは、実は、ある一人の人物の個性かもしれないと思うことがある。その人の名前は山口正造。私の大叔父に当たる。社長に就任したのは晩年だが、創業者から実質的に経営を引き継いだのは大正初期。一九四四年（昭和十九年）に亡くなるまで、富士屋ホテルの陣頭指揮を執るとともに、日本のホテル業界の中心的人物でもあった。

正造の功績なのだろう、彼の時代は、恐らく富士屋ホテルが最も世界的に名声があった時期に当たる。同時に、日清・日露

戦争の勝利で過信した日本が、軍事大国であらうとした時期でもあった。

当初、『箱根富士屋ホテル物語』を書いたころ、私は、富士屋ホテルの最も華やかな時代の象徴として、山口正造を見ていた。だが、『消えた宿泊名簿』ホテルが語る戦争の記憶』の執筆を通して、私は、正造のもう一つの顔に気づかされる。

平和主義者としての正造である。

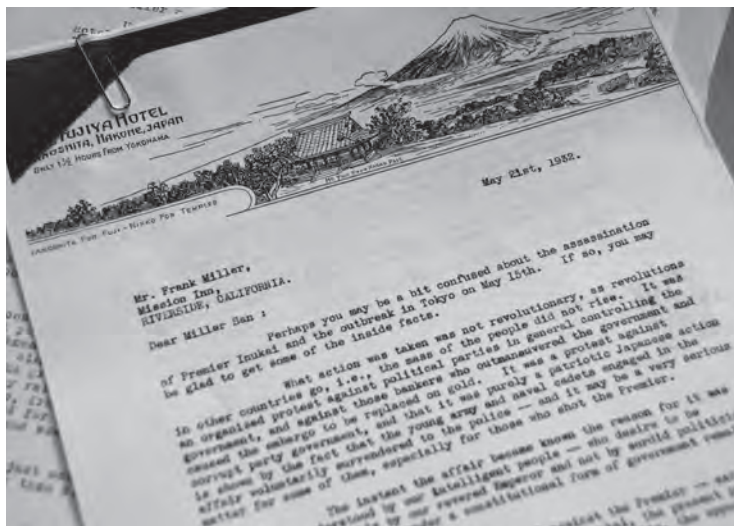
一九四一年（昭和十六年）の夏、開戦を回避するための日米極秘交渉が行われた。その舞台となったのが、富士屋ホテルと正造の別荘「午六山荘」である。舞台になったのは、富士屋ホテルが近衛文麿の鼻根の宿だったという、たまたまの偶然かもしれない。だが、日本軍の南方占領とともに日本のホテルが競って乗り出した、占領地のホテル経営に富士屋ホテルがかかわらなかつたのはなぜな

のだろう。

その答えが、一九四二年（昭和十七年）に正造が発行した小冊子にあった。現物を探し出すのに苦労をした背景には、そこに書かれたことが、当時、少なからず危険思想であったからではないか。小冊子には、大東亜共栄圏における占領地の私有財産、特にホテルは、現地の経営者に運営させよ、と記されていた。

しかし、四四年に亡くなったせいもあり、正造の残した言葉は、いつも巧みなレトリックに包まれていて、はつきりと平和を語るものではなかつた。だから、私は、彼の心の中を、いつも状況証拠から推測するしかなかったのである。

ところが、先日、私は、カリフォルニアで思いもかけず、平和を熱く希求する正造の手紙に出会ったのだった。



5・15事件の直後、友人のフランク・ミラーにつづられた山口正造の手紙

カリフォルニア州オレンジカウンティの
リバーサイド。そこには、富士屋ホテルと
ほぼ同年に創業した古いホテルがある。ス
ペイン様式の修道院を模した建物ゆえに、
ホテルはミッシェンインと名付けられた。

創業者の息子で、ホテルを発展させたフ
ランク・ミラーは、旅が好きで、建築が好き、
ホテルのゲストを面白がらせることが何よ

り好きという点において、正造とよく似た
人物だった。二人が意気投合したのは容易
に想像がつく。やがて彼らは、暗雲立ち込
め始める世界情勢のなか、平和を希求する
ようになる。

どきりとさせられたのは、一九三二年（昭
和七年）年に書かれた一連の手紙だった。
満州国が建国され、五・一五事件が起きた年、

戦争への歩みが始まったまさにその
年。たとえば三月の手紙で、正造は、
満州国について語っている。

資源のない日本にとつて、領土拡
大は使命であること。日本が日清・
日露の戦争で多くを中国大陸に投資
してきた事実。そして、日本が、多
くの問題を抱え込んだ中国の隣国で
あることを強調する。そして、満州
国は、一つの解決策であり、日本と
中国、満州とモンゴル（内蒙古自治
区のこと）の平和を願うものである
と正造は説明する。

一方で、こうした意見が、自己中
心的なものであることを強く自覚
し、だからこそ多くの意見が聞きた
いと友人に語りかける。本当に必要
なのは親日の意見ではなく、反日の
意見なのだと正造は言う。

感情の高ぶりと息遣いさえ感じられる文
面は、最後にこうつづられている。

（しかし、遠からぬうち、私たちみんなが
平和になり、隣人である中国とも笑って握
手できることを望んでいます）

機内でこれを読んだ時、目の前のビデオ
スクリーンが、尖閣諸島問題のニュースを
報じていた。正造の手紙は、七十八年の時
を経てもなお、所々の文面は、普遍的な問
題を示唆しているのだった。

思い返せば、政府内に設置された鉄道省
国際観光局による、昭和の外交誘致政策が
本格的に始動するのが、ちょうどこのころ
である。世界から日本が孤立するなか、だ
からこそ日本の美しさをアピールしようと
した人々の思いの切実さを、正造の手紙は、
改めて教えてくれた気がする。

日米開戦は九年も先のことであったのに、
正造の手紙には、友人の国との平和の終焉
を予感しているようなところもある。

ホスピタリティーとは、人と人の機微を
読むものであり、それは、国と国の機微を
読むことにもつながる。その意味において、
正造はまさに卓越した能力を持ったホテル
マンだったのである。今、正造が生きていた
なら、どんな未来を読むのだろうか。

（やまぐち ゆみ）

旅の図書館
新着図書紹介

「若者の海外旅行離れ」が喧伝されるようになって久しい。

一九七三年（昭和四十八年）生まれで自らもバックパッカーとしての豊富な旅行経験を持つ著者は、「ニッポンの海外旅行―若者と観光メディアの50年史」（山口誠著、ちくま新書）で、

「若者の海外旅行離れが米国同時多発テロ事件の五年前である一九九六年から十年以上も続くと一貫した傾向であることを踏まえ、その後の伝染病や天変地異、あるいは、長引く不況や雇用情勢の悪化といった国内の経済問題に原因を求め「不正確な印象論」では、「問題の核心には届かないだろう」と喝破する。

「いつから海外旅行は、若者にとって魅力的ではなくなったのか」こそが問われるべきであり、若者の変化だけでなく海外旅行の変化も議論すべきというのが著者の視点だ。

著者は、この一九九六年を分水嶺とする「若者の海外旅行離れ」現象について、それまで若者に



新書判 256 ページ
定価 780 円
ちくま新書

海外旅行の魅力伝えてきたバックパッカーの貧乏旅行がピークを経て収斂してしまつたことと、スケルトンツアーの急拡大によって「海外旅行の形」の定番化が進んで固定されてしまつたこと、という二つの要因を指摘する。旅先の生活文化から脱文脈化された、買い・食い・中心の短期旅行だけでは「今後も日本の海外旅行は衰えていき、やがて海外旅行の歴史も失われてしまふ」と危惧しつつも、「歩く旅」の可能性は「未だ尽くされていない」と結んでいる。

一九五九年（昭和三十四年）から一九九〇年（平成二年）まで続いた超長寿テレビ番組「兼高（平成二年）まで続いた超長寿テレビ番組」兼高がおる世界の旅。日本人の海外渡航が自由化される五年前に始まつた番組は、多くの日本人に「外国」への憧れを抱かせ、レポーター役を務めた兼高さんは今なお「海外旅行」のシンボリックな存在として記憶されている。

番組終了後も執筆・講演などで活躍を続けてきた兼高さんが、「ここであらためて、世界を巡りながら見えてきたこと、感じたこと、同世代や若い世代に伝えたいことを綴ってみよう」と出版したのが本書「わたくしが旅から学んだこと（兼高がおる著、小学館）だ。

現地での取材、コーディネート、プロデューサー兼

ディレクター、ナレーターと番組で何役もこなしていた兼高さんが「世界の旅」の取材で移動した距離は地球百八十周分、取材した国は百五十にも及ぶ。百日をかけた最初の取材で羽田空港を出発する時には横断幕と万歳三唱で送られ、第一回で放送されたローマまでは、香港に一泊してプロペラ機で五十二時間かかったという。

米国の故ケネディ大統領や英国のチャールズ皇太子など、各国で出会った世界的なセレブは数知れず、石油の採掘権や太平洋の島までお土産にもらつたという経験も、千五百回という歴史ある番組ならではのエピソードだろう。

八十歳を超えた現在も、「ここ数年来計画しているのはコーカサスの旅」「ナポレオンが亡くなった絶海の孤島、セントヘレナ島にも行きたい」と意欲を示す兼高さん。「結局、わたくしは、昔も今もこれからも旅をしていくのでしよう。『世界の旅』は今も継続中」なのだ。（挑生）



四六判 208 ページ
定価 1,500 円
小学館

■旅行年報2010 最新刊

直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料をもとに分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地・観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。二〇一〇年九月発行。



■旅行者動向2010 最新刊

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果をビジュアルに解説。二〇一〇年十月発行。



■「時代の価値から考える 若者の海外旅行離れ」

巻末「ガールズマーケット旅行意識調査」
当財団主催第15回海外旅行動向シンポジウム「採録集」
「えっ！海外旅行がカッコ悪い!?」
今時の「ガールズ」意識とは？
懸案の「若者の海外旅行離れ」を今までにない視点から取り上げました。
「旅行離れ」の原因を、雇用や収入といった社会的・経済的な側面にとらわれず、若者の価値観や行動を深く知る。ことから実践的な解決策を探ります。



若者の消費行動の特徴については、松田久一氏から世代論的解説をお聞きし、その対応として、「フュージョン消費」などがキーワードといえる。東京ガールズコレクションについてチーフプロデューサーの永谷亜矢子氏から学びました。そのビジネスモデルは創造的で、若い女性層(F1層)の心・価値意識を揺さぶることで興味と消費意欲を刺激しています。
また、本シンポジウムに合わせて、若い女性から大きな支持を受けている「読者モデル」へのグループインタビュー調査や、F1層女性へのウェブアンケート調査も実施、独自の研究成果と「ガールズマーケット旅行意識調査」結果も収録しています。二〇一〇年十月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。
担当：財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03・5208・4704 <http://www.jtbr.co.jp>

次号予告

●低迷の続く日本経済の景気浮揚策の一つとして観光振興への期待が高まっています。次号は、「観光のフロンティアに挑むをテーマに、今後の新たな観光資源開発の牽引者として注目されている方々の観光振興に向けた具体的な方策、取り組み等について紹介します。」

調査研究だより

●青森県と秋田県にまたがる白神山地区は、一九九三年、屋久島とともに日本で最初の世界自然遺産として登録された。環境省では二〇〇四年度以降、エコツーリズムの普及啓発や協議会の設立、ガイド人材の育成などエコツーリズムの推進にかかるさまざまな推進支援事業を行ってきているが、諸事情から、これまでの支援は、世界遺産区域を有する一部の町村(青森県西目屋村、秋田県藤里町)に限定されたかたちで推進されてきた。

●このため、白神山地区全体の情報の共有化や発信、各市町村が連携した旅行商品の提供など、環白神山地区の市町村が連携した取り組みは十分進んでいないのが実情である。

●こうした課題を受けて環境省では、本年度から遺産地域やその周辺の関係市町村が連携して、エコツーリズムの推進を通じた白神山地区の保全と観光利用、および地域振興を図るべく、「環白神エコツーリズム推進連絡会議」の設立に動き出している。

●当財団では、環白神山地区が一体となつて、白神山地区の魅力を生かしたより多様なエコツーリズムの推進に向けて、継続的な支援をしていきたい。

(大隅)

編集後記

◆空気が澄み渡り夜景が美しい季節となりました。島国日本は函館、神戸、長崎の三大夜景に代表されるように山と海を背景にとっておきの夜景が各地で楽しめます。丸々氏の言葉を借りれば「日本は観光資源としての夜景の宝庫」です。

◆美しい夜景は見る人々の気持ちを癒やし、その印象を深く心に刻みます。景観形成の一環として、また観光客誘致の目玉として魅力的な夜景を演出する。光のまちづくりが注目され始めました。旅行者の滞在時間を延ばし、宿泊につなげてゆくためにはナイトライフの楽しみは欠かせません。感動的な夜景は安いコストで実現できるその最大の装置です。また個性を生かし観光資源として夜景を磨く活動が各地で展開されています。

◆工場夜景ツアーが活況を呈しています。十一月八日に開催された丸々氏が「チェアマンを務める第二回「日本夜景サミット2010」の特別企画として「工場夜景サミット」が実施されました。横浜で工場夜景クルーズを成功させているKMCコーポレーション、本号に登場しました川崎の事例発表に続いて、室蘭、四日市、北九州の三市により先行の二市に続くべく取り組みが紹介されました。

◆夜景観光はポテンシャルに満ちています。

(宇八)



観光文化 第204号

第34巻6号通巻第204号

発行日 2010年11月20日

●
発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第二鉄鋼ビル 旅の図書館内
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八
発行人：新倉武一

●
印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554